

D 142 和服構成の諸要因(その15) —あわせとせん断変形—

大妻セ夫 ○金谷喜子 都築昌子 谷山幸佐子 木野内清子

目的 和服は、現在、晴着的要素が強く、主としてあわせのきものを用いられる。前報
等では、縫い目及び可縫性とせん断変形との関連について検討してきたが、今回は、あわ
せにおけるせん断変形ととりあげ、布を重ね合わせた場合のひずみの状態をとらえるため
に本実験を試みた。

方法 試料は、表地として白絹(ちりめん)各種を用い、裏地には白平絹を用いた。縫
い方の種類は、背縫い・わき縫いととりあげ、手縫いで製作し、せん断実験を行った。そ
の結果から、縫い目の有無及び縫い方の違いによるせん断変形とのかかわりを考察した。

結果 せん断特性値は、表地に裏地を重ねた場合・縫い代の多少・縫い代の始末の方法
等により影響される。まず、表地に裏地を重ねた場合は、表地1枚に比べて、その値は、
おおむね増加するが、表地の厚・落に因り、厚地の場合はその変化は少ない。縫い目と
つけた場合は、縫い目なしに比べてその値に減少がみられ、縫い代の多少では、少ない方
の値が小となる傾向がみられた。